

典には性慾を罪惡と記してあり、僧戒としては之を嚴禁してある。處が、自分の内よりは猛烈な勢を以て性の慾念が起つてくるものを、よい加減にしまひつける事のできなかつた正直な聖人は、外部にしかつめらしき顔をして、内心に慾性を藏して知らんふりをしてゐるに堪へなかつた。こゝに聖人の苦みがあつた。固定した律法と躍動流轉してやまない内からの衝動と、いづれに順ふべきか。前者に順ふのが善であり、後者に順ふのが惡とせられてゐる。處が、聖人は前者に順はうとしても内心から順ふ事ができず、いつのまにやら後者に引きずられてをるのである。こゝに於て、自分はゐるに足らない罪惡深重な男だと思はずにはゐられなくなつた。律法へか、女へか。行かねばならぬと思ふ心と、いつてしまふ心の衝突になやんで、泣きながら、さうかして行くべき道に行かうとせられた。そうして、ある時には絶食して無劫寺に籠つた事もあつた。つひに、二十八歳の暮頃から京の六角堂の觀世音に祈願をこめられた。女に行く心、之を否とする律法の心、この矛盾にたちて、

さうか前者を捨て、後者に行かる、やうに祈願をこめられた。その祈禱の間に、觀世音の告に、

行者宿報ありて設し女を犯さば

我女となりて汝に犯されん。

一生の間能く莊嚴也

臨終には相もなうて極樂に生れん。

さういふ言葉をきかれました。之れやがて女に行けとの告ではなかつたか。聖なる力として祈願してゐた觀世音自らが、女となりて汝に抱かれやうといはるゝと感得した所で、聖人は佛と女との一體を感ぜられたのであつた。女を抱く事は佛に抱かるゝ事である事を感じたのであつた。

かく内面に道の開けた聖人は、ゆくりなく、三條の大橋で聖覺法印に逢ひて法然聖人の所に訪ねて、聖人から、惡人成佛の本願の道を聞き、こゝに自己の内なき、

し聲を、師の外からの教へへの合致を感じ、つひに、律法的な叡山を降り、自分の好きな女と結婚しつゝ、法然聖人の膝下に教訓を受けるやうになりました。聖人の肉食妻帯は聖人の中心の欲求の實行であつた。肉食妻帯の上に本願力を味はれたのであつた。(拙著「親鸞聖人論」参照)律法の殻をやぶりて自分の本然の道に進まれた所にも九歳の折、あのごこまでもやまない純真な心が光つてゐるのであります。

六

三十五歳の時には、時の政府が法然聖人の下に集る人達を危険思想だとして解散を命じ、法然聖人は土佐に流罪になり、親鸞は越後に流罪になりました。この時は聖人も憤慨せられたものが見えて、「主上臣下、法に背き、義に違へ、怒を爲し、憤りをむすぶ。」と絶叫してゐられます。この破壊は外部よりの破壊であつたが、之によりて聖人が師と別れて獨りたつ道に精進せられたのであつた。之から十五年を

經て、師の「選擇集」に飽きたらぬ心から、「教行信證文類」といふ一書を著すやうになりました。こゝに師の思想からの解脱が現はれてゐます。

七

四十歳から六十歳まで常州稻田に庵を結び、第二の妻を迎へ(第一の妻は聖人の十三の時に死なれたと傳へられてゐる)六人の子を得、門弟も澤山にできて新らしい僧團ができてゐた。常に殻にゐる事のできぬ聖人はつひに、この家族と僧團との殻を破壊して、丁度トルストイが老いてヤスナヤボリヤナの家をぬけてたやうに、常陸の家を逃れて故郷である京に歸られた。京に歸つてからは、長安洛陽のすみかも跡を止むるものうしこて、處々に移住してゐられました。さうしてその間には交る人も多くもつてゐられなかつた。六十歳にして、妻子と門弟をすて、靜處につかるゝ聖人の姿の上にも、私は若々しい魂の光りをみるのであります。この若々し

い魂があつたればこそ、その後「愚禿鈔」「入出二門偈」「淨土文類聚鈔」「唯信鈔文意」「三經往生文類」「一念多念證文」「淨土和讃」「高僧和讃」「正像末和讃」等の製作ができたのであります。そうして、八十八歳になつて潑刺した力にみちた「自然法爾章」の一編をものする事もできます。あの「自然法爾章」を讀むに、純真な、率直な、いつも殻に止まる事のできぬ聖人の魂が強い光でかゞやいてをるのであります。

かくて九十歳にして、龜山天皇の弘長二年十一月二十八日にこの世から姿をかくされました。(一一、二、一六)

あとの言葉

□昨夜の盆の月を京の東山で見ました。一つの月だけども、京で見れば京の趣きがあつて美しかつた。大阪から來た友人と京の友人と五人でそゞろあるきしつゝ、月を浴びて、月にふさはぬやうな議論もしたり、いやみもいふたり、歌をうたふたりして、しつこりと着物に露のうつる頃に、東福寺の寓に歸りました。

□「華嚴三昧の中から」の印刷が後れてゐた爲に、何もなく氣後れがして、「にはひ草」の第八も第九も出せなかつた。第八「沈黙の自殺者」の原稿がまだできないから、第八巻として、この集を發行する事にしました。

□この集に納めた文章の多分は「中外日報」に掲載したものです。「佛說無量壽經の體驗者親鸞聖人」は「眞宗の世界」に「破壊に生ける親鸞聖人」は「現代」に出たのです。

□遙か下の方に電車や汽車の進行する音が聞えるけれど寺の庭には晝のうちから蟲がないて

ある。朝から頬白が頻りにないてゐた。

□「薬王樹」を出してゐるから、このあまの言葉に録する事が尠くなりました。私は本集を京の印刷屋に渡す爲に、三日に京に來たのです、本日之を渡して明日歸國します。

目次

第一章 常倫を超出する者……………	(一)
第二章 主義の諸問題……………	(四)
一。新運動新思想に對する嚴重な取締……………	(四)
二。主義者達へ……………	(五)
三。最後の繫縛……………	(六)
四。道德の世界と宗教の世界……………	(七)
五。理想主義に就て……………	(八)
六。真理の否定的表現……………	(一〇)

第三章 愛の諸問題……………(一〇九)

- 一。男の生首に接吻する女……………(一一一)
- 二。徹底なき愛の傷み……………(一二六)
- 三。愛は所有する……………(一二六)
- 四。愛は苦也力也……………(一四四)
- 五。自己の愛に精進する者……………(一五〇)

第四章 雑……………(一六一)

- 一。子供の訓育に就て……………(一六三)
- 二。垣を造る心……………(一六七)
- 三。大谷派の現状に就て……………(一七五)

- 四。三人の俊寛の最後……………(一九一)
- 五。北安田より……………(二三三)
- 六。恐るべき人物評……………(二三七)
- 七。佛説無量壽經の體驗者親鸞聖人……………(二三四)
- 八。破壊に生ける親鸞聖人……………(二五五)

以上

規 約

にほひくきは私の著作集のやうなものです。
毎月一回宛發行したいと思つてゐます。澤山
かけた時には頁數の多いのを出し、かけない
時には小さいのを出します。少しもかけない
時には出さないのです。ですから毎號定價が
かはります。で、大ざつばに一年分拾圓、半
年分五圓としておきます。前金で申込まるゝ
方はその積りで申込んで下さい。そうします
とその號その號の分を引き去り入金のあるだ
けの分の本を送ることにします。出さなくな
つた折には前金を返す事は勿論の事です。

大正十一年十一月二十日印刷

大正十一年十一月廿五日發行

定 價
並製壹圓貳拾錢
特製金貳圓

著 者 曉 烏 敏

印 刷 者 堀 井 清

發 行 所 石川縣石川郡出城村北安田
香 草 舎
振替金澤三六九八番

賣 捌 所 丁 子 屋 書 店
振替(大阪)一〇二九〇番
七座(東京)四五九七番

藥 王 樹

毎月一回發行

定價金七錢
一年金八十錢

これは曉烏敏が主幹する雜誌です。主として自分の思想を發表し、知友の思想をも發表するのです。

運命論者の群

定價金二十五錢
五十部已上一冊金二十錢

これは北安田パンフレット第一卷として發行したものです。曉烏の七高に於ける講演筆記です。

發行所

石川縣石川郡
出城村北安田

香 草 舍

にほひくさ

第一卷	生くる日	第三版
第二卷	親鸞聖人論	第六版
第三卷	死の國々	第四版
第四卷	父の印象	第二版
第五卷	温かき大地	第二版
第六卷	諸行無常	第二版
第七卷	華嚴三昧の中より	第二版
第八卷	常倫を超出する者	新刊
第九卷	不可思議轉の記	近刊

曉烏敏著作一部作

第一卷	更生の前後	第六版	金三圓
第二卷	獨立者の宣言	第三版	金二圓五十錢
第三卷	前進する者	第二版	金二圓八十錢

京都東六條下珠數屋町

丁子屋發行

振替大阪一〇二九〇番

338
378

12.1.20

終